



六
花

7

2021

りっかはいくかい

囃あゆ



山田六甲

千

田植して淡海は空の国となる

梅雨晴間稿書く指を日のはぐれ

祖母の名はすゑと申しし冷さうめん

五月雨や水のやうなる貌の鳥

梅雨ごもり箱の中から靴の音

春月を引きずつて行く列車かな

新緑や山に登れば山見え

戸袋に巢立ちの親子かしましき

箱根卯木硫黄のにほふ三原山

マスカットてづまのごとく出されけり

水際を蠅虎の走りけり

五月雨や道を渡れる夜の蛙

大池は青田の風に染まりけり

刈あとの麦田を鳥のあゆみけり

大いなる未完の池の仰々子

囃あゆ黄金の鮎の掛りけり

高砂や巢立つ第三木曜日

春愁や砂を鳴かせし靴の跡 住田千代子

「鳴かせた靴」というのが巧い。世の漢たちは自惚れだから、「俺が泣かした？」と思うだろう。しかし泣かされたのが漢とみてはいけない。逆もありけり。鳴き砂の名所は、琴引浜（京都府）、琴ヶ浜（島根県）をはじめとして多数の鳴き砂、鳴り砂の海岸が存在する。季語「春愁」春。（六甲）

さざ波の姿に乾く若布かな
芽柳の枝垂れにまでは及ばざり
天上へはくれん百花揺れにけり
爪赤く塗りある夜の春愁
春愁や砂を鳴かせし靴の跡
太子会のけふ薮戸を跳ねてあり
薫香に包まる寺や植木市
春禽の小雨の中に散りにけり
連翹の垣より洩れ来お念仏
つくばひの水濁らせて楓の芽

透き通る蛇しか脱げぬ蛇の衣 谷口 一献

蛇なんぞにはなりたくもないが、しかし望んで衣は脱げても蛇の衣は蛇にしか脱げない。蛇は気味悪いが、脱皮した透明に近い衣はたしかに幸運をもたらしそう。一献らしい発想の秀句である。季語「蛇の衣（ぎぬ）」夏。（六甲）

春愁やはなししたよなせぬやうな
春愁の母の蹴飛ばす紙こつぷ
新緑の裏山の径蛇よぎる
効いたよね早めの酒や春の風邪
夏兆し医者言葉も忘れけり
紫陽花の彩りに降る酸性雨
一輪の紫陽花夜は寂しさう
疑うてみるも新茶のかほりかな
藤の花天に溶け込み雨催ひ

俳句は記録と詩に分かれるが、詩だけでも記録に勝ることもある。記録はほとんど自己のものであり、日記でもある。詩は共有の記録であるから、読者がその記録をそれぞれの経験に照らし合わせて味わい読めばいい。それが多数の人に共感してもらえばいいのである。

雪嶺抄

絵蠟燭 ◎ 笹村 政子

春愁や花の溶けゆく絵蠟燭
初ざくら一つ位牌に夫婦の名
一刷けの雲の行方や松の花
春筍や土の匂ひを掘り起こし
春愁や当てずっぽうの視力表
渦潮の渦のほどけてゆく処
夏めくや帆布のリユツク背にして
山墓に日の名残りある余花の寺
嫁ぐ日や籐椅子の父動かざる
戻れば山の近づく暮春かな

政子の作品、

▽絵蠟燭の作品、春愁は「春のもの思いであり憂えあり、哀愁である。安楽極まって哀情が深い。（健吉）」、「四辺は春景色で美しいのに、これは不思議なことだ。（秋櫻子）」と、捉えどころのない感情であると解説している。政子の言い当てた絵蠟燭の花柄が今溶けゆくような感情かもしれない。愁いを目に見えるように視覚化した佳い作品。

▽「日の名残り」はノーベル賞作家、カズオ・イシグロの小説名。この作品は一人称視点によるバイアスを巧妙に利用した例としてしばしば取り上げられる。語り手の執事ステイブンスと女中頭のミス・ケントンとの淡いロマンスについて回想の中で理想化され書かれている。映画にもなった。執事は思いを言葉に出せずミス・ケントンと別れてゆくがそれを思い起こされる作品で余花に通う。

▽視力表とは自分の視力を知るためなのに、なぜか成績をよくしたいという変な見栄が起きる。視力を正しく測ってもらって初めて治療方法がきまるのに。それは血圧、ヘモグロビンなど血液検査にも「あてずっぽう」が面白い。主宰もアルファベット2つの開いた位置を覚えていて、適当に答えることにしている。でも医師はそれが分かっているらしい。

▽一つ位牌というのも、愛し合った夫婦を一枚の位牌にして供養する方法もあるのだろう。あの世でも二人は一つにしてやろうとする遺された者の哀惜の深さの現れ。連理の位牌。

春めける ◎ 志方 章子

蜷の道我が来し方と重なりぬ
彼岸かな夫の思ひ出話など
春蘭に明るくなりし仏間かな
楓の芽ほぐれてきたる一人住み
夫はもうどこにも居らぬ桜かな
老ゆるとは斯ういうことか春めける
蜷汁すする夕べや夫は亡し
二分咲きであれども花の威厳かな
いかほどに獲れしことやら蜷舟
結局は捨ててしまへり蓮華草

章子の作品、

▽老ゆるとは、の作品、その年齢になって初めて老いるというのはこういうことをいうのかと悟った。悟りたくない年齢ではあるが、皆が年をとると云々というが、その年齢にきてみて初めて知ったのである。これは章子ばかりでなく、人はその域に達して初めて見える人生の景色である。「春めける」季節節のもたらす感情のひらめき気づきを味わっているのである。

▽蜷汁が独りになって今までとは違う味がしたのである。味も匂いも二人の時代よりまったく違う感じがするのである。

▽蓮華草を夢中になって摘んだが、結局は飽きてすててしまうのである。これが遊びの究極で「面白うてやがて悲しき鶉舟かな 芭蕉」に通う心理である。また美空ひばりの「お祭りマンボ」の「お祭りすんで日が暮れてつめたい風の 吹く夜は 家を焼かれた おじさんと ヘソクリとられた おばさんの ほんにせつない ためいきばかり」にも通じよう。

紫雲英を摘むことが目的ではなく手段だったのだ。

▽蜷（しじみ）舟の句、蜷が沢山捕れたのであろうかと、慮っている。地元の人なら舟の喫水線かわかるが、地元民でない作者は想像するしかない。この蜷舟はおそらく松江の宍道湖か瀬田川かである。昔浜田久美子が紫源氏日記を執筆するために石山寺を訪ねたことがある。そこで蜷汁を頂いたと思うが宍道湖の蜷は現地で食べた事がない。宍道湖には五回くらい行っているが一度も食べた事が無いのも不思議である。

ゆたにたゆたに ◎ 升田ヤス子

花嫁 となる 雪柳くぐりきて
お中日二月堂より輪袈裟出し
あかめ繭春日を燃やしゐたりけり
美容院帰りに土筆摘んでをり
催花雨や校正の朱を入れをれば
夫の衿直しやりゐる桜二分
樹木葬幼な桜の咲きにけり
青空をゆたにたゆたに桜散る
花屑を洞に古い木となりにけり
紫木蓮何を隠してゐるのやら

ヤス子の作品。

▽寛にたゆたに（ゆたにたゆたに）とは、ゆらゆらと漂い動くさまで、掲句の場合は桜のゆらゆらと動く様が青空をも揺らしているよ、と形容。いかにも桜の咲きそろった万朶の状態。もちろん作者の心象や心理状態にも反映しているのだろう。現代の日本人には桜とはおおむね染井吉野をさすが、私には山桜の方が品があつて好き。掲句の場合は山桜よりむしろ染井吉野の状態を詠んでいるのだろう。「我（あ）が心浮き尊（ぬなは）辺（へ）にも沖にも寄りかつましじ」〈万・一三五二〉の「私の心は、ゆれゆれて、浮かぶ尊葉（ぬなは）のように、岸边にも沖にも寄らないでしょう」という揺れる恋心、に悩む女性の意味か何か原因があつて心が揺れている状態を桜に託しているのか、萬葉集からゆたにたゆたにという詞を思い出して幹旋したのか佳句である俳句にはりリズムが大事なのである。これから古文を使った作品が毎月でてくるのが楽しみ。

▽花嫁の句も佳い。雪柳がまるでライスシャワーのようで花嫁花婿を祝福しているのであろう。ライスシャワーとは「子宝に恵まれるように」「食べるものに困らないように」という、夫婦への祝福の意をこめているところから……。印象鮮明の句。

▽あかめ繭（もち）の作品赤い実から火を連想して燃えているように思ったのだろう。しかしそれを燃えているようだ、としなくて春日を燃やしている。と断定したのが佳い。短詩は断定の詩であるから印象強い作品になる。

▽美容院帰りなのに、土筆を見つけて童心を呼び起こされた行動の不調和が面白い。

▽紫木蓮の作品は、木蓮の姿から、人の拳のように見立てて、握りしめた拳の中は？というのである。拳を開くと宝石でも入っているような。隠せば隠すほど手のひらを開けて見たくなるのは人情。

桜蘂降る ◎ 升田ヤス子

鐘の音の海に出でゆく臙かな
 春筍のかたち悪しきも売られをり
 山藤のこぼるる峡の瀬音かな
 春閑けて鳥影山にしづもれり
 手の中に萎るるままに蓬摘む
 草笛を諦めし日のありにけり
 家々の蔵に家紋や初つばめ
 今いちど正面にして夕桜
 しやぼん玉空をかすめて飛びゆけり
 桜蘂降る雨のつぶてを浴びながら

不二男の作品。

▽不二男俳句作品の姿勢のよろしさは「基本季語」で詠むことである。基本季語を知るには虚子編『季寄せ』（改訂版・三首堂）に収録されている。最悪なのは近年出されている新何とか歳時記には「それも季語？」というような物まで収録されて作者と読者の季節感の共有ができない状態になった。去来は「先師が「季節を表す表現（季語）を一つでも探し出したら後世に良い贈り物になります」と新しい季節の発見を奨めているが、芭蕉の望んだものは、はなれてきているような気がする。新しい季節を探すには基本季語をしっかり身に付ける必要があるのである。その点不二男はさすがである。

▽「桜蕊降る」が正しい季語であるが、時には「桜蕊」だけで詠んでいる句もあって、また歳時記の例句に優れたものは見当たらない。ことりも三木市立図書館ちかくで「桜蕊降る」のおびただしい句を詠んだがすべて捨ててしまったようだ。不二男の詠んだ時期には当に雨のよく降る時でその雨粒を「つちて」と詠んだが雨の「つちて」がなくても蕊は降る運命なのである。そこを詠んだほうが新しい気つきがあったろう。

▽蕊よりも蓬摘みの句の方が自然体で不二男には向いている。

▽鳥影山の句は固有名詞の方が面白い。原句の「に」があるから意味が解からない。

▽夕桜の姿を確かめるといふか、しっかり脳裏に焼き付けておきたい正面の桜への思いが伝わって味わい深い。

▽草笛は私もあきらめた時があったので共感できる。

▽春筍は踏み込みが足りないのが惜しい。形の悪いのが句の眼目であるからこのままでは報告に終わる。

礁にめくれる ◎ 善野 行

村の辻水子地藏の風車
春雨に竹の垣根の青さかな
そぼふれる向かひのカフェの春燈
水草生ひ敷ける真中のひとつ岩
春愁や礁にめくれる波の色
春愁や波飽きもせず砂洗ひ
四阿にひとり飯食ふ花の昼
捻りあひ引きずりあうて渦潮は
溝川に花ひた散らす一枝かな
閑古鳥鳴く花過ぎの茶屋女

行の作品。

▽「礁」「いくり」はこの場合「いわ」と読むのだろう。春愁の様子が、波打ち返す反復に例えているのか。礁に何度も「めくられて」というのが行の発見した表現。消えたとおもったら、またぐり返す春愁に辟易しているのかも。礁にめくれる波の色が春愁の色なのだ見たのが独創的。しかしそれを突き詰めると春愁どころではない波が押し寄せるかも知れない。現れては消え現れては消える繰り返しである。

▽「四阿（あずまや）に腰かけて弁当を使っている状態を詠んだ。が「ひとり飯食ふ」は芭蕉「舞（朝顔）に我は飯食ふ男かな芭蕉」が脳裏に焼きついていたのだろうか。しかし芭蕉の作品は一人といわずして独りで食事をしているのを思わせる。この省略を学びたいもの。

▽「水草」の句、「真中に生ひ敷ける」は写生で、水面にびっしりと水草が生い茂った中に岩が一つあって、石庭を鑑賞するように印象的。岩が一つという作品はことりが伊根の舟屋で詠んだ「一湾の一つ巖に冬怒涛 ことり」があるが、その光景を思いだした。ことりは冬怒涛に荒れる海だが、行の作品は、禅的で静かな朝の春の緑の光景である。いずれも格調高い作品で心象深い。

▽渦潮の句、じつと目を凝らす作者が見えてくるような作品。潮の流れが急な鳴門か来島海峡の光景か。「引きずりあうて」の捉え方が面白いが「若鮎の水ひつばつて遡のぼる 佳乃」いう名句が「円虹」主宰山田佳乃さんにすでにあるので惜しい。しかしこのような挑戦は何度も試みてみるのは良いことである。

砂を鳴かせし ◎ 住田千代子

さざ波の姿に乾く若布かな
芽柳の枝垂れにまでは及ばざり
天上へはくれん百花揺れにけり
爪赤く塗りるる夜の春愁
春愁や砂を鳴かせし靴の跡
太子会のけふ薮戸を跳ねてあり
薫香に包まる寺や植木市
春禽の小雨の中に散りにけり
連翹の垣より洩れ来お念仏
つくばひの水濁らせて楓の芽

千代子の作品。

▽若布がさざ波の姿（形）に乾いているという比喻が巧い。が、人によってイメージを上手く再現出来ないきらいがある。

▽鳴き砂の浜に行けば作句意欲を刺激されるのは俳人として当然だが、砂の靴跡を「砂を鳴かせた跡」だと詠んだのが男女のことを連想させ、物語性を含んでいる。どのような男（女）が、鳴かせたのか、鳴（泣）いたのはどちらなのか？と想像が広がる。泣き砂その言葉に抒情詩的なものを既に含んでいるが、男女が二人砂浜にいたことは想像にかたくない。それを思い起こした創造力に感銘。夢風撰。

▽太子会（たいしえ）の句。千代子は加古川鶴林寺周辺をよく散策するという。たまたまその日は太子会で薮戸が跳ね上げてあって中が少し見えたのだろう。鶴林寺は聖徳太子と縁が深く聖徳太子の御命日法要（中日）を中心とした3日間。に行われる。千代子は鶴林寺周辺で秀句を詠んでいる。

▽はくれん（白木蓮）が沢山咲いて天上へ向けて揺れている、という作品、句柄が大きくて簡潔で印象深く白く鮮やかな景色が佳い。

▽芽柳の句、様々な木々に春の芽吹きが訪れているが、しだれ柳にはまだ芽吹きが来ていないよ、芽吹いたら綺麗だろうに、待ち遠しいものだ、という願い。

▽植木市の句も寺の周辺か境内で行われる催しの一つ、植木市がやってきたよ、と詠んだ。千代子は身の回りで起こる出来事や季節の催しを上手く句に取り込んで句を詠む。一か月50句くらい軽く出来る人。六花への投句も一番早く送ってくると編集長。